『少女の誘惑３』

「ちわーす、手伝いに来ましたー」
　深夜、ロスティン・マイカンは意気揚々と領主の館の外れにある、堅牢な館を訪れた。
　玄関のドアは開いていたのだが、ロビーにも廊下にも看守の姿はなかった。
（鍵はどこだ、鍵は？）
　ロスティンは食器を下げるときに、少女と思われる囚人に深夜部屋に来てほしいと誘われていた。
　顔は見れていないが、ロスティンの妄想の中ではその少女はとびきりの美少女だ。
　事前準備はしっかりしてきた。
　こっそり鍵を持ち出して、美少女と甘い夜を過ごすのだ！
　しかし……。
（無い！？　あの子の部屋の鍵だけない）
　まさか誰か先に？
　ロスティンが廊下に目を向けると、仄かな明かりが漏れている部屋があった。
　そっと近づいて、隙間から部屋の中を覗き込もうとするが良く見えない。
　ドアに耳を当てて、中の様子を伺う――。

「……な…？　……こ…？」
「……サーナ・シフレアン。神殿で働いていた……洪水で気が動転して……」
「君……ら……と……」
「私を……出して……？」

（うう、良く聞こえない。何をしてるんだ）
　ロスティンは少しだけドアを開こうとした。
　キィィ
（わわっ！）
　ドサッ
　音が出たことに驚いて、ロスティンは持ってきた荷物を落としてしまった。
　中の二人がこちらに顔を向ける。
　１０代半ばくらいの銀髪の華奢な少女と、騎士のカル＝ウィルの姿がそこにあった。
「あ、あはははは……ごきげんよう、お嬢さん。俺も混ぜて欲しいなぁなんて、いやいや日を改めた方がいいかな、さいならー！」
　慌ててロスティンは玄関へとダッシュ。
「あれ？　開かない、なんでだ、クソーッ」
　しかし玄関のドアは内側からは開けられないようになっていた。
（まて、逃げる必要あるのか？　まだ俺は何もしてないよな！？）
　どうしようか迷っていると、じきにカルも玄関へ訪れた。
「違うんだ、決して逢引を覗きにきたんじゃなくて、人手が足りなそうだから手伝いにきただけで、でもさっきのあの子可愛かったとかそんなことはどうでもよいッスねはははははは」
「私も、ランプの油を足しに来ただけだ」
　カルは平然とドアを開けて、ロスティンと共に外へ出た。
「そうですよねー。それでは、おやすみなさい！」
　ロスティンはバタバタと本館へ駆けていった。

こちらのリアクションは以下の方に発行されています。
ロスティン・マイカン